

鄭芝溶と『自由詩人』

熊木 勉 (福岡大学)

1. はじめに

鄭芝溶が北原白秋主宰の『近代風景』に詩を投稿、掲載され、その後、同誌で 20 数編の詩と 2 編の散文を発表していることについてはよく知られている¹。このほか、『街』『同志社文学』『空腹祭』でも詩を発表した²。一方で、彼が『同志社大学予科学生会誌』および『自由詩人』に詩を掲載したことはほとんど知られていないようである³。鄭芝溶は『同志社大学予科学生会誌』に 17 編の詩を寄せており、『自由詩人』には 19 編の詩と 3 編の散文、1 編の翻訳詩を寄せている (未見の作品を含む⁴)。『同志社大学予科学生会誌』に掲載された詩のうち他に日本語で重複して作品を掲載しているもの、および朝鮮語による発表があるものを除いた詩、すなわち他誌に掲載されていない同誌でのみ確認できる詩は 4 編、『自由詩人』では同 7 編、散文が 3 編である⁵。鄭芝溶の作品群において、すでに知られている作品も含め日本語詩が一定数存在することもさることながら、日本語詩でも朝鮮語詩でも重複する詩が見当たらない作品が二誌に上記のように詩 11 編、散文 3 編あること、重複する作品においても改作や朝鮮語詩との比較において確認を要する部分があることなど、鄭芝溶の日本語詩の再検討が必要であるように思われる。

とりわけ従来の鄭芝溶の理解において抜け落ちていたように思われるのは「同人」活動への認識である。鄭芝溶は『街』同人を経てその同人のうち詩を主として書くメンバーらによってあらたに作られた『自由詩人』誌の同人となっている。本発表では、日本語詩の検討は今後の課題として簡単に問題提起をすることとどめ、『自由詩人』と鄭芝溶の関係から何をうかがうことができるのかを中心として考えてみることにしたい⁶。

¹ 鄭芝溶の日本語作品については鴻農映二 (1988) および김학동編『鄭芝溶全集 1. 2』(1988 : 2 版)で紹介され、박경수 (2000[李修京訳 : 2005])、拙稿 (1992・2001)、斉藤真理子 (2000)、사나다 히로코 (2002[同氏博士論文、吉川風 (2007) 名で刊行された単行本もおおむね内容を同じくする]) などで検討が試みられたことがある。

² 『同志社文学』掲載作品については김학동編(1988)収録、『街』『空腹祭』については호데이 토시히로(1996)で紹介されている。

³ 『自由詩人』と鄭芝溶の関係についてはいち早く天野隆一 (1976[外村彰編 : 2013 再録] : 35 頁)に鄭芝溶の名が見え、佐々木靖章 (2005 : 105 頁)が同誌の成果の一つを「同志社の環境と児玉 (児玉実用[発表者注])を初めとする厚い友情の輪が朝鮮からの留学生である鄭芝溶を詩人として育てたこと」としており、外村彰 (2013 : 785 頁)も鄭芝溶の名に触れている。

⁴ 発表者が確認したのは『自由詩人』全 5 号のうち、第 1 号と第 4 号だけであるが、佐々木靖章氏が『『自由詩人』『京都詩人』目次と解題』(2005)で同誌全目次を整理されており、鄭芝溶の詩や散文の題名は確認できる。

⁵ この数字には未見の作品は含めていない。未見の詩で題名が他作品と重複しないものとしてほかに詩 1 編、散文 1 編がある。また、『同志社大学予科学生会誌』と『自由詩人』の両誌に掲載され他では確認できない詩が 1 編 (「窓に曇る息」) がある。

⁶ 平成 25 年 10 月 5 日第 64 回朝鮮学会大会懇親会において、鄭芝溶の日本語詩を研究しているという方にお目にかかったことがある。本発表は国会図書館で偶然目にした『自由詩人』収録の作品の重要性への認識から作業を始め、同志社関連の資料を調査する過程で『同志社大学予科学生会誌』収録の作品も確認した次第であるが、本発表を準備するなかで、この方が鄭芝溶の日本語詩で知られていないものがある点や学生たちの雑誌に鄭芝溶が作品を若干載せてい

2. 鄭芝溶の日本語詩

2-1 作品一覧

以下、日本語詩を記し、あわせて日本語詩に対応する朝鮮語詩を提示する。「×」印のものは該当する朝鮮語詩が現在のところ見当たらないものである⁷。拙稿（2001）で作品一覧に入れることができなかった作品については○印をつけた。改作を含め日本語作品で複数回発表しているものは（重）印、未見のものには（未）印をつけた。未見であっても題名のみで判断して重複しているものと考えられるものにさしあたり（重）印をつけたが、今後確認が必要である。なお、鄭芝溶は1923年5月3日同志社大学予科入学、1926年4月1日同志社大学予科修了英文科入学、1929年6月30日同卒業である。

1925年

- | | |
|--|-----------------------|
| 新羅の石榴、『街』, 1925.3 | 柘榴, 『朝鮮之光』, 1927.3 |
| まひる, 『街』, 1925.7 (重) | × |
| 草の上, 『街』, 1925.7 | × |
| ○カフツェー・フランス, 『同志社大学予科学生会誌』, 1925.11 (重) | 카페ー・프랑스, 『学潮』, 1926.6 |
| ○車窓より, 『同志社大学予科学生会誌』, 1925.11 | 汽車, 『東方評論』, 1932.7 |
| ○いしころ, 『同志社大学予科学生会誌』, 1925.11 | 조약돌, 『東方評論』, 1932.7 |
| ○仁川港の或る追憶, 『同志社大学予科学生会誌』, 1925.11 (重) | 슬픈印象畫, 『学潮』, 1926.6 |
| ○シグナルの燈り, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○はちゆう類動物（一九二五・六月・朝鮮線汽車中にて）, 『自由詩人』 1925.12 | 爬虫類動物, 『学潮』, 1926.6 |
| ○なつばむし, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○扉 ^{ドア} の前, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○雨に濡れて, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○恐ろしき落日, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○暗い戸口の前, 『自由詩人』 1925.12 | × |
| ○詩・犬・同人（散文）, 『自由詩人』 1925.12 | × |

るということについて言及されていたのではなかったかとの記憶につきあたった。具体的な資料名や作品名はうかがっていないはずである。ともあれ、念のため本格的な作品の検討はこの方の研究を待つことにし、本発表では発表者が知りえた範囲での作品一覧と本発表で必要と思われるごく一部の作品の言及にとどめたい。この方のお名前を失念してしまい、その作業の進展のほどは確認できない。あるいは発表者が未調査の論文や口頭発表などの中に、すでにこの方の研究成果が出ている可能性も大いにある。

⁷ ただし、日本語詩と朝鮮語詩を対照すると表現に違いが見られるものは多い。また、日本語作品でも詩を重複して発表した場合に改作されたものが多い。

1926年

- 遠いレール, 『自由詩人』 1926.2 (重) (未) [×?]
- 帰り路, 『自由詩人』 1926.2 (重) (未) [×?]
- 眼, 『自由詩人』 1926.2 (未) [?]
- まつかな機関車, 『自由詩人』 1926.2 (重) (未) [셋밤안기관차, 『朝鮮之光』, 1927.2?]
- 橋の上, 『自由詩人』 1926.2 (重) (未) [×?]
- 幌馬車, 『自由詩人』 1926.2 (重) (未) [幌馬車, 『朝鮮之光』, 1927.2?]
- 山娘野男, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 산앳 색씨 들녘 사내,
『文藝時代』 1926.11
- 公孫樹, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2×
- 夜半, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 (重) ×
- 雪, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 (重) ×
- 耳, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 (重) ×
- チャップリンのまね, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 ×
- ステッキ, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.2 ×
- 螺旋形の街路, 『自由詩人』 1926.3 (未) [×?]
- 笛, 『自由詩人』 1926.3 (重) (未) [피리, 『詩文學』, 1930.5?]
- 酒場の夕日, 『自由詩人』 1926.3 (重) (未) [저녁해入살, 『詩文學』, 1930.5?]
- 窓に曇る息, 『自由詩人』 1926.4 (重) ×
- 散弾のやうな卓上演説—亡国・退廃・激情のスケツチャー, 『自由詩人』 1926.4 ×
<せんちめんたるなひとりしやべり (散文以下三篇)>
 - 停車場, 『自由詩人』 1926.4 ×
 - 退屈さと黒眼鏡, 『自由詩人』 1926.4 ×
 - 日本の布団は重い, 『自由詩人』 1926.4×
- [○朴濟瓚「雨の夕暮れ (朝鮮の詩)」 [鄭芝溶翻訳], 『自由詩人』 1926.4 ×
- 初春の朝, 『自由詩人』 1926.5 (重) (未) 이른 봄 아침, 『新民』, 1927.2
- 原稿紙上の夜行列車 (京釜線の汽車にて) (散文), 『自由詩人』 1926.5 (未) ×
- 雨蛙, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.6×
- 海辺, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.6 (重) 바다, 『朝鮮之光』, 1927.2⁸
- 窓に曇る息, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.11 (重) ×
- 橋の上, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.11 (重) ×
- 眞紅な機関車, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.11 (重) 셋밤안기관차,
『朝鮮之光』, 1927.2
- 幌馬車, 『同志社大学予科学生会誌』, 1926.11 (重)幌馬車, 『朝鮮之光』, 1927.2
- かつふえ・ふらんす, 『近代風景』, 1926.12 (重) 카페—프랑스, 『学潮』, 1926.6

⁸ 「海辺」は三つに詩が分かれており、最初と最後の部分は『近代風景』ではそれぞれ別作品となっている。中間部分は「海辺」でのみ確認できる。

1927年

海, 『近代風景』, 1927.1 (重)	바다, 『朝鮮之光』, 1927.2
海, 『近代風景』, 1927.2 (重)	×
海, 『近代風景』, 1927.2 (重)	바다, 『朝鮮之光』, 1927.2
みなし子の夢, 『近代風景』, 1927.2	×
悲しき印象畫, 『近代風景』, 1927.3 (重)	슬픈印象畫, 『学潮』, 1926.6
金ぼたんの哀唱, 『近代風景』, 1927.3	船醉, 『学潮』, 1927.6
湖面, 『近代風景』, 1927.3	湖面, 『朝鮮之光』, 1927.2
雪, 『近代風景』, 1927.3 (重)	×
手紙一つ, 『近代風景』, 1927.3 (散文)	×
幌馬車, 『近代風景』, 1927.4 (重)	幌馬車, 『朝鮮之光』, 1927.2
初春の朝, 『近代風景』, 1927.4 (重)	이른 봄 아침, 『新民』, 1927.2
春三月の作文, 『近代風景』, 1927.4(散文)	×
甲板の上, 『近代風景』, 1927.6 (重)	甲板우, 『文藝時代』, 1927.1
まひる, 『近代風景』, 1927.7 (重)	×
遠いレール, 『近代風景』, 1927.7 (重)	×
夜半, 『近代風景』, 1927.7 (重)	×
耳, 『近代風景』, 1927.7 (重)	×
帰り路, 『近代風景』, 1927.7 (重)	×
郷愁の青馬車, 『近代風景』, 1927.10	×
笛, 『近代風景』, 1927.10 (重)	피리, 『詩文學』, 1930.5
酒場の夕日, 『近代風景』, 1927.10 (重)	저녁해入살, 『詩文學』, 1930.5
眞紅な機関車, 『近代風景』, 1927.12 (重)	셋밤안機關車, 『朝鮮之光』, 1927.2
橋の上, 『近代風景』, 1927.12 (重)	×

1928年

旅の朝, 『近代風景』, 1928.2	×
馬 1, 『同志社文学』 1928.10	말, 『朝鮮之光』, 1927.9
馬 2, 『同志社文学』 1928.10	말 2, (정지용 시집 수록)

1929年

かつふえふらんす, 『空腹祭』, 1929.9 (重)	카페ー・프랑스, 『学潮』, 1926.6
-----------------------------	-----------------------

2-2 改作・翻訳と日本語詩

[改作・翻訳について]

・「かつふえ・ふらんす」(『近代風景』1926.12)は「카페ー・프랑스」(『学潮』1926.6)とは異なり後半部分のみが日本語になった詩であるが、「カフツエー・フランス」(『同志社大

学予科学生会誌』1925.11)は『学潮』と同じく前後半ともに日本語である。後の「鄭芝溶詩集」(1935)でも前後半部がともにある。『近代風景』とそれを転載した『空腹祭』でのみ短くされた。

・『同志社大学予科学生会誌』で発表した後、改作の過程で後半部だけを『近代風景』に掲載したものに「雪」がある。「海辺」は改作後に詩が2編に分けられ、中間部分は削除。→改作から感じられるのは、『近代風景』に作品を送るにあたって、詩が散漫にならないように焦点を絞り、作品の完成度を上げていること。

・題名として「仁川港の或る追憶」が『近代風景』で「悲しき印象畫」となった。これは逆に詩の題名を変えることで詩の背景をあいまいにしたものか。また「슬픈 印象畫」(『学潮』1926.6)ではダダ的な色彩がさらに濃厚にあらわれる。

・「はちゆう類動物(一九二五・六月・朝鮮線汽車内にて)」(『自由詩人』1925.12)は朝鮮語で「爬虫類動物」(『学潮』1926.6)として発表された。ともにダダイズムの影響が濃厚に見える。末尾には「朝鮮語原作自譯」とある。

→初期詩の一部で朝鮮語詩は日本語詩よりも実験的な要素が濃厚にうかがわれる。朝鮮の詩に新たにモダニズムを導入しようとした意識的な試みか。

[日本語作品だけが存在するものについて]

・『近代風景』『同志社大学予科学生会誌』『街』『自由詩人』で合計24編、散文4編(未見を含まず。改作の如何を問わず重複分は1編として計算。「海辺」は『近代風景』で2編に分けられるが1編とする。「せんちめんたるなひとりしやべり」は散文1編とする)。

詩…「まひる」「草の上」「シグナルの燈り」「なつばむし」「扉^{ドアー}の前」「雨に濡れて」「恐ろしき落日」「暗い戸口の前」「公孫樹」「夜半」「雪」「耳」「チャップリンのまね」「ステッキ」「窓に曇る息」「散弾のやうな卓上演説^{テーブルスピーチ}・亡国・退廃・激情のスケッチ-」「雨蛙」「海辺」「橋の上」「みなし子の夢」「遠いレール」「帰り路」「郷愁の青馬車」「旅の朝」

散文…「詩・犬・同人」「せんちめんたるなひとりしやべり(停車場、退屈さと黒眼鏡、日本の布団は重い)」「手紙一つ」「春三月の作文」

3. 鄭芝溶の日本語詩の捉え直し

3-1 京都の詩人たちと鄭芝溶

[京都の詩壇]

・京都での詩文芸誌は南江^{なんえ}二郎が編集した『新詩潮』(1922.11~全8輯)から本格的に行われたと見ることができる。それを前後する時期に学生たちの同人誌も生まれ、その中に同志

社大学予科生同人を中心とした謄写版『街』(1924.4?～全5号?9)があった¹⁰。1924年11月には『街』は活版刷りとなって本格的な同志社の文芸誌となった。1925年2月号編集後記には「同志社、廣くは京都までが一の文藝雑誌を持つてゐない事を遺憾に想ってから本誌は早くも第三號を出す事になつた」とある。鄭芝溶が「新羅の柘榴」を発表したのは第4号であった¹¹。一方、1925年1月、天野隆一により『青樹』が創刊される。京都市立絵画専門学校の在校生たちによる詩誌で、同誌は京都のモダニズム詩運動をけん引し第35号(1931.12)まで続くことになる¹²。同じく1925年1月に『青樹』とともに京都詩壇を代表するプロレタリア文学系の『轟轟』が刊行される。そして、1925年12月に『街』同人たちのなかで詩を中心として活動する者が集まって刊行されたのが『自由詩人』である。この同人誌の中心人物は児玉実用であった。鄭芝溶はこの同人誌の創刊号から同人および編集同人として参加した。南江、天野、児玉は1928年の島崎藤村や高村光太郎、北原白秋らによる詩人協会の設立にあたって会員に推挙されており、それなりに中央詩壇から認められた存在であったようである¹³。『自由詩人』を第5号まで続けた児玉は1926年8月、『自由詩人』同人と『路上』同人を合併して京都詩人会を組織し『京都詩人』を創刊した¹⁴が、鄭芝溶はこれに参加していない。その後、児玉は『同志社文学』の創刊(1927.12)から雑誌部委員をつとめた。

[児玉^{きねちか}実用]

- ・1905年大阪に生まれる(本籍は鹿児島)。1923年大阪府立堺中学校卒業。1924年同志社大学予科入学。1924年6月『街』に第3号から参加。1925年12月『自由詩人』創刊。1930年同志社大学文学部英文科卒業。1993年没¹⁵。
- ・鄭芝溶は1903年(1902年とも)生まれ。1923年徽文高普卒業、5月同志社大学予科入学。1926年同志社大学文学部英文科入学、1929年6月同卒業。
- ・『自由詩人』の発行所は京都市上京区電植物園終点下ル北星館。ここは児玉の寄宿先¹⁶。

眞夏の星空は素晴らしい西瓜をすつぱり切ったやうだと言ふと児玉は天女が脱ぎ去つた衣

⁹ 発表者が見ることができたのは謄写版第2号(1924.5)、第3号(1924.6)、第4号(1924.7)である。ただ、不思議なことに、第2号の奥付に「創刊號」と記されている。「第二號からは廣く市場に賣りだしますので」(66頁)との言及があるので、市販という意味で第2号が同人たちには創刊の意味があったのかもしれない。活字版の創刊号に「六號雜記」との編集後記があるので、おそらくそれ以前に謄写版で5号まで出ていたのではないかと思われる。

¹⁰ 児玉実用著作集刊行会編(1997A:300頁[佐々木靖章「あとがき」])

¹¹ 活版刷り『街』が何号まで刊行されたかは不明であるが、第8号は早稲田大学図書館に存在しており(호테이 토시히로(1996))、この号に鄭芝溶も作品を掲載している。

¹² 外村彰(2003:783頁)

¹³ 外村彰(2003:786頁)

¹⁴ 佐々木靖章(2005:106頁)

¹⁵ 児玉実用著作集刊行会編(1997B:375頁[略年譜])

¹⁶ 佐々木靖章(2005:105頁)

のやうだと云ふ。ミイちゃんの赤い頬ぺたはちいつちやい煖爐のやうだと言ふと兒玉はミイちゃんの揺籃の上に虹が掛つてゐると言つてゐる。北星館の二階でこう云ふ風な贅沢な雑談が時に交換されるのである。彼が陶器の詩を書いた時私は赤煉瓦の詩を書いた。彼が涙でやつて来ると月経で対抗する覺悟はもつてゐる。

「詩はうす紫の空氣を吸ふことなり」と彼が勝手な定義を下した時

「詩は犬を愛撫することなり」と勝手な定義でやつつけた。

犬を愛するにキリストは必要ないのである。憂鬱な散歩者ぐらゐで善いのである。

鄭芝溶「詩・犬・同人」より部分引用

いんきな赤煉瓦づくりの下に佇んで/ 泥と薔薇と破れ靴の詩をたくらんでゐる。// 犬ころの濕しめつばい情熱で濡れて吠えて/ そこいらぢうを ころげまわつてきた後// 帽子もぼろぼろのまんとも/ じつさい可愛いひとりものゝ心臓も// びつしより濡れてぶるぶるふるへて/ 温室と戀と蠟燭の燈あかりをしきりに呪つてゐる。

鄭芝溶「雨に濡れて」全文

ほの暗らく袂こき/ 陶器すえものの一つ/ さびさびと静もりてあり。/ 現世うつせみを儚おきなごころなむ/ 翁心の寂しさに/ ひそびそと語り疲れて黙しあり/ 黙し 黙して/ 色もなくただ映りてあり/ 世のありとある/ すべて祕ひめたる陶器すえものの/ 重く 暗らく 深らかに/ 晝ひの央さなか 眠るごと/ 静もりてあり/ 黙してあり。

兒玉実用「老寂心度」全文

[朴濟瓚(瓚)の詩]

- ・朴濟瓚は徹文高普から鄭芝溶と一緒に同志社大学に来た学生で『揺籃』誌とも関係して作品も発表した¹⁷。
- ・鄭芝溶は朴濟瓚の詩を翻訳している。朴濟瓚が数編ながらも鄭芝溶と同じく『同志社大学予科学生会誌』『自由詩人』に作品を寄せたのは鄭芝溶の紹介があつたのではないか。また鄭芝溶自身も朴濟瓚の詩に共鳴してゐたのではないか。
- ・朴濟瓚の詩からは「亡国」民としての鬱屈が感じられる。

3-2 亡命・退廢・激情

・『自由詩人』に「散弾のやうな卓上演説テーブルスピーチ—亡国・退廢・激情のスケッチ—」という作品がある。この亡国・退廢・激情という言葉は、京都時代の鄭芝溶の葛藤とその姿とをある程度的確に表しているようにも見える。

・国をうしなつた者としての自意識、哀しみ、そして孤独感が清新なイメージ・言語と結合したところに、鄭芝溶の詩がある。鄭芝溶の鬱屈はときに自虐へともつながつた（「チャップリンのまね」など）。

¹⁷ 金口東（口はさんずいに學）（1987：120頁）

・鄭芝溶の疎外感。その中で彼が願ったのは散文「日本の蒲団は重い」にあるように「朝鮮の花を咲かせること」であった。『京都詩人』に参加しなかったこと、『近代風景』で北原白秋に対してもどこか距離を置き続けたように見える距離感の裏側には常に「朝鮮」という自意識があったのではないか。

参考文献

- 金口東（口はさんずいに學）（1987）『鄭芝溶研究』，민음사.
- 鴻農映二（1988）「정지용과 일본시단-일본에서 발굴한 시와 수필」『현대문학』9월호. 현대문학사.
- 김학동編（1988：2版）『鄭芝溶全集 1』『鄭芝溶全集 2』，민음사.
- 熊木勉（1992）「정지용과 근대풍경」『승실어문』9, 승실어문연구회.
- 호데이 토시히로(1996)「정지용과 동인지『街』에 대하여」『관악어문연구』21, 서울대 국어국문학과.
- 児玉実用著作集刊行会編（1997A）『角笛』，京都修学社.
- 児玉実用著作集刊行会編（1997B）『ユリカモメ』，京都修学社.
- 斎藤真理子（2000）「わかりさうなすがたのひと-鄭芝溶のこと」『言語文化』17, 明治学院大学言語文化研究所
- 熊木勉（2001）「정지용의 일어서」『정지용의 문학세계연구』（김신정 엮음），깊은샘.
- 사나다 히로코（2002）『최추의 모더니스트 정지용』，역락.
- 박경수（2000[李修京訳：2005]）「鄭芝溶 の 日本語詩研究」『山口県立大学国際文化学部紀要』11, 山口県立大学.
- 佐々木靖章（2005）『『自由詩人』『京都詩人』目次と解題』『文献探索 2005』，文献探索研究会.
- 吉川風（2007）『朝鮮最初のモダニスト鄭芝溶』，土曜美術社出版販売.
- 天野隆一（1976[外村彰編：2013再録]）「青樹創刊の頃」『京都のモダニズム（コレクション・都市モダニズム詩誌 24）』，ゆまに書房.
- 外村彰（2013）「一九二〇年代の京都のモダニズム-『青樹』とその周囲」『京都のモダニズム（コレクション・都市モダニズム詩誌 24）』，ゆまに書房.

日本の蒲團は重い

似合はぬモノを身につけ 下手な日本語をしゃべる自分が たえきれなく淋しい。自分ながら盛つく位の 激するまじつばたまが飛び散り 鋭くあらつぽい金鳳鞋の へんな發音が出てくる。獨特な不作法や 雑作的に手をふるやら 顔肉の筋が激しく伸縮されるなきのくせが出る時に しんせつな左遷の惡意の笑ひを感されたやうな氣遣が何はれて体の相手が ばらばらに割れてしまひさうな淋しさで 下宿へ歸つてくる。この ほろ見たいな慶應生のために きれはさ いやな目に逢ふのだらう。寢床に入つて考へて 見る。今日は一日中曇つた日だ。

朝鮮の空は何時も ほがらがで美しい。朝鮮の子のこころも ほがらがで美しくある筈だ。

やゝもすれば曇りがちな このこころが呪はしい。道敷民の種であるこそ雜草のやうな根強きを持たねばならない。同處へ植えつりても美しい朝鮮風の花を咲かねばならない。

自分の心には恐らく いろいろの心が いつしよになつてゐるだらう。そう云ふこゝろが誰にも知られるものでない。肝心な マートババまでが知つてくれないから いやになる。戀のこころ。鬼のこころ。男のこころ。女のこころ。赤煉瓦 悶鬱のこころ。懸崖のこころ。墓のこころ——その中墓のこころが何もなく繪畫に部分を点めて居るやうな氣がしてならない。獨乙あたりの森の傳説に出てくるやうな 氣の毒に飢えた淋しい翠——それが自分である。幸虧ささびの感觸——ま白い敷布の上に四つ足を空にしてねころんでゐる娘 しかも此れが 風邪を引き ものを語り 戀をする童非になつたら さんなこゝろになるだらう。娘の頬も赤くなる

破れた障子の紙が 針のやう冷い風に ビユルルル 夜中の小唄をうたひ出す。蒲團の奥までもぐりこんで纏まる。……日本の蒲團は重い。